

321 更年期うつ病に対するホルモン補充療法の有用性についての検討

国立精神・神経センター国府台病院 同精神科*
木村武彦, 赤松達也, 関沢明彦, 富山三雄*
早川達郎*, 亀井雄一*

[目的] ホルモン補充療法 (HRT) は, 最近の更年期外来での治療法のうち最も中心的な役割を担っている。その理由として治療効果のスペクトルが極めて広いことがあげられ, 精神・神経症状の改善にも有効であるといわれている。しかし, 精神疾患である更年期のうつ病についてのHRTの効果についての報告は殆どみられない。今回我々は, 更年期外来初診時に精神科医の面接を受けDSM-III-Rの基準により, うつ病と診断された患者にHRTを行いその有用性について検討したので報告する。

[方法] 当院更年期外来でうつ病と診断された6名(平均年齢51.3歳)に対しCEE 0.62mg/dとMPI 2.5mg/d連続投与によるHRTをおこなった(6例中2例はHRTを行う以前よりすでに向精神薬を処方されている)。ホルモン投与前, 投与後12週についての变化を, 安部改変Kupperman更年期指数(K指数), SDS (Self-rating Depression Scale)の各調査用紙を外来受診時に配布し得られた結果について比較検討した。

[成績] HRT前のK指数は41.8で平均17.3であり, 12週後のK指数の平均は8.8であり全例低下した($p < 0.05$)。SDSでは, HRT前が平均46.3であり12週後は37でありこれも有意に低下した($p < 0.05$)。K指数の17症状については, 手足のしびれが有意に改善した。また, のぼせ, 発汗, 冷え, 夜間覚醒, 動悸は6例中4例が改善した。

[結論] 更年期うつ病患者に対するHRTの効果は, K指数やSDS値を低下させ, 主なのぼせ等の血管運動神経症状の改善が認められ患者の苦痛軽減に有効であると考えられた。

322 低エストロゲン環境がMC3T3E1骨芽細胞核内エストロゲンレセプターに及ぼす影響—特にエストロゲン投与効果を中心に—

高知医大, 同歯科口腔外科*
板東 尚, 前田長正, 相良祐輔, 尾崎登喜雄*

[目的]我々はヒト海綿骨にestrogen receptor(ER)の存在を証明し,報告してきた。今回マウス胎仔由来のMC3T3E1骨芽細胞を低estrogen(E)環境下で培養し,核内ERの動態を検討した。さらにE負荷を行い,ERの変動を併せて検討した。[方法]MC3T3E1骨芽細胞をFetal Calf Serum(FCS)で培養(A群),またcharcoalで処理したFCSにて培養(B群)の2群について核内ERを測定した。培養開始後5日目及び8日目にB群に対してEstrone(E1)5pg/ml,Estradiol(E2)1pg/mlをそれぞれ加え,添加48時間後の核内ERの動態について検討した。[成績]A群の核内ERは $9.37 \pm 0.17 \text{ fmol}/\mu\text{gDNA}$ で,培養期間による差は認められなかった。低E環境下にて培養を行ったB群では,核内ERは5日目に $6.15 \pm 0.22 \text{ fmol}/\mu\text{gDNA}$,8日目に $5.25 \pm 0.19 \text{ fmol}/\mu\text{gDNA}$ と,A群に比較して有意に低下した。次いで培養5日目のB群にE1,E2を加え48時間後に核内ERを測定し,E1投与例では $7.46 \pm 0.41 \text{ fmol}/\mu\text{gDNA}$,E2投与例では $8.61 \pm 0.27 \text{ fmol}/\mu\text{gDNA}$ とE1,E2投与例ともに経時的に有意に核内ERは増加した。さらに培養8日目のB群にE1,E2を投与し,48時間後に核内ERを測定し,E1投与例で $6.02 \pm 0.09 \text{ fmol}/\mu\text{gDNA}$,E2投与例では $6.24 \pm 0.05 \text{ fmol}/\mu\text{gDNA}$ とE1,E2投与例ともに経時的に有意に増加した。[結論]MC3T3E1骨芽細胞を低E環境下で培養(B群)を行うと,5日目,8日目に,核内ERは段階的に有意な減少を認めた。核内ERが減少する5日目,8日目にE1,E2を投与すると核内ERは,投与48時間後には投与前に比べて,有意に増加した。以上より,低E環境下によって引き起こされた核内ERの減少は,Eの投与により回復することを示した。このことは閉経期骨粗鬆症におけるE投与の作用機序の一端を明らかにし,その有用性を示すものと考えらる。